

「義仲生誕」

— 語りの構造を踏まえて読む
『平家物語』の授業（第一回）—

小椋 雅典

(広島大学大学院)

(広島県立倉橋高等学校)

其時義仲二歳なりしを、母泣く／＼かかへて、信濃へこえ、木曾中三兼遠がもとにゆき、「是いかにもしてそだてて人になしてみせ給へ」といひければ、兼遠うけとつて、かひ／＼しう廿余年養育す。やう／＼長大するままに、力も世にすぐれて強く、心もならびなく剛なりけり。「ありがたき強弓精兵、馬の上、かちだち、すべて上古の田村、利仁、余五將軍、致頼、保昌、先祖頼光、義家朝臣といふとも、争てかそにはまさるべき」とぞ人申しける。

或時めのとの兼遠を召して、宣ひけるは、「兵衛佐頼朝既に謀叛をおこし、東八ヶ国をうちしたがへて東海道よりのほり、平家をおひおとさんとすなり。義仲も東山、北陸兩道をしたがへて、今一日も先に平家をせめおとし、たとへば日本国二人の將軍といはればや」とほのめかしければ、中三兼遠大きにかしこまり悦んで、「其にこそ君をば今まで養育し奉れ。かう仰せらるること、誠に八幡殿の御末ともおほえさせ給へ」とて、やがて謀叛をくはたてけり。

十三で元服しけるも、八幡へ参り、八幡大菩薩の御まへにて、「我四代の祖父、義家朝臣は、此御神の御子となつて、名をば八幡太郎と号しき。かつうは其跡をおふべし」とて、八幡大菩薩の御宝前にてもとどりとりあげ、木曾次郎義仲とこそついたりけれ。兼遠「まつ廻文候へし」とて、信濃国には根井の小弥太、海野の行親をかたらふに、そむく事なし。是をはじめて信濃一國の兵者ども、なびかぬ草木もなかりけり。上野国に、故帯刀先生義賢がよしみにて、田子の郡の兵ども皆したがひつきにけり。平家末になる折をえて、源氏の年来の素懐をとげんとす。

(寛一本・巻六「廻文」)

(教材本文は「新編 日本古典文学全集 平家物語①」へ市古貞次校注・訳 小学館 一九九四・六)に拠った。傍線、稿者)

諸テクストにおける「義仲生誕」の有する意義

清盛・義仲・義経の三者が「平家物語」の三主人公であるか否かは措くとして、「物語の展開を支えている」^{注1}ことに關しては異論のないところであろう。就中、諸「平家物語」テクスト^{注2}にあって、義仲のみに幼少期から青年期を形象化する語りが存在することは特筆すべき事柄である。

では、何故諸テクストの語り手は義仲の生い立ちを語らなければならなかったのであろうか。

一つには、一般的に諸テクストが「作者（小椋註—本稿では語り手）は勝利者のよろこびよりも、敗者の憂悶や慟哭に密着して物語るのを好む。勇士の鬼神をも哭かしむる勇猛のドラマも、いつしか敗者を、あるいは遺族を痛めつけてやまない物語になってしまう」^{注3}ごとく、義仲が最たる悲劇の体現者であったことに由来するのであろう。殊にその悲劇性は語り手によって「宿怨の仇敵である義朝の子の頼朝・義経のためにしばしば前途を妨げられ、あげくのはて、父義賢とまったく同じ運命をたどり、その同族の源氏のために打ち取られるという、悲惨な最期を遂げること」^{注4}に形象化されている。

父義賢は、久寿二年八月十六日、鎌倉の悪源太義平が為に誅せらる。（覚一本・卷六「廻文」^{注5}）

また一方で、義仲が幼少期から青年期を過ごすこととなった地の歴史的地域性をも考證の対象とする必要がある。下出には当時の信州に形成された北陸武士団の在り方について次の指摘がある。

（上略）が、これ（小椋註—北陸以外の地域、殊に東国は早期に源平抗争の舞台となったこと）に反して北陸は、武士の力が政局の帰趨を決定する最大要素たるを確立した保元の乱（一一五六年）、ならびに源平の争覇戦で平氏の勝利を宣明にした平治の乱（一一五九年）においてすら、直接には無風地帯に属していた。^{注6}

いいかえるならば、積極的に中央に反抗することによって自己の領主権の拡大を図ろうとの意志に燃え、虎視眈々としてその機をうかがうといったような性格の武士団では、少なくともなかったとしてよいであらう。^{注7}

したがって、これらの指摘を受けるかのように覚一本は、「木曾といふ所は、信濃にとつても南のはし、美濃さかひなりければ、都も無下にほどちかし。平家の人々もれきいて、「東国のそむくだにあるに、北国さへこはいかに」とぞさわがれける。」（巻六「飛脚到来」（傍線は小椋による。）と語り、諸テクストにおいてもそれぞれが類する語りを展開するのである。要するに各語り手は、平治の乱以前、争覇戦における権力関係の「無風地帯」に存した群集的北陸武士団の歴史的転身とも称すべき変貌に途惑いながら、それが都人（「平家の人々」を含む）に与えることとなった驚愕や恐懼、さらには不安を大々的に語るのである。

ところで、各語り手は都人の動揺だけを見つめていたわけでもなかった。各語り手は都人の動揺を体感するや否や、歴史的・地域的争覇戦の「無風地帯」であった北陸を新たな時代の潮流で以て源平抗争の舞台に変貌させた源氏勢力の棟梁、木曾義仲の形象

化に自ずと意を注いでいたのである。

教材本文波線部の語りから、信州の山里において兼遠に養育された源氏の棟梁義仲は、平家討伐を蜂起した際、自らの所領を殆ど持ち得なかつたと推測される。しかも、そうでありながら、「根井の小弥太、海野の行親」を初めとして「信濃一國の兵者ども」は「なびかぬ」者なく、「上野の國」の「故帯刀先生義賢がよしみ」である。「田子の郡の兵ども」も義仲に「皆したがひつ」いたのであつた。換言すれば、義仲軍は当時所領を媒介に成立した主従関係（所領安堵→一族繁栄）とは異なる独自の形成原理により組織された武士団であつたと言えるのである。

このように考えるならば、義仲擡頭の歴史の変遷に諸テクストの語り手が関心を示したのは至極当然のことである。だが、延慶本・四部本・盛衰記の所謂読み本系テクストの語り手は、義仲の父「故帯刀先生義賢の吉見」（四部本）により武士団形成が成就したことを語るのみである。しかも、盛衰記に至つては木曾四天王の一人、「根井滋野行親」が「異計を当國・隣國に回らし、軍兵を木曾の山下に集め」たと語るのである。すなわち、これら読み本系テクストは、義仲軍の武士団形成原理に（義仲）なる人物形象の介在を許容しない語りの構造を構築していたのである。

「義理を超越した親子愛の語り」に関する位相

幼少にして容顔美麗かつ伶俐であり、大器たる武將の片鱗漂う義仲像を、数多くの言表群で以て形象化するテクストが延慶本で

ある。そこには、統率性に秀で、「武」・「美」・「知」を兼備した武將としての氣質に富む、将来的な新棟梁の出現をまさに予見させる語りの構造がある。

無論、こうした武將性は他テクストにおいても義仲言説として語られるところである。しかしながら、それを自らの欲望のまま、語る行為の結果として顕示的に語る語り手は、延慶本の作品世界に露出の兆候を示す傾向にあると言え過ぎなのであるうか。

さらに、延慶本の語り手が「義仲——兼遠／養子——義父」を超越した親子愛の形象化に力点を置き過ぎたがために、却つてそれを誇示する結果となつた語りを構築していることにも言及しておかなければなるまい。

但し、ここで留意を要することがある。確かに、延慶本の「義仲——兼遠／養子——義父」を超越した親子愛の形象化は、仮言するならば、「義理を超越した親子愛」の語りとして同テクスト内に構造化されている。しかし、覚一本にそうした語りが存在しないかと言えば、そうではない。覚一本の兼遠も「今日も先に平家をせめおとし、たとへば日本國に二人の將軍といはればや」と語る義仲の勇壮な言に「大きにかしこまり悦んで」いるのである。しかも、元服以前、敵中視察に出生した義仲は義父「兼遠にぐせられ」ており、愈々「謀叛」の烽火を上げる際、「廻文」で以て「信濃國」中に群雄する小武士集団に「かたら」つたのも、紛れもない兼遠その人なのであつた。

だが、覚一本の語り手は「義理を超越した親子愛」の語りを顕在化しようとする欲望を持ち得てはいない。その点、延慶本との

位相を鑑みると、覚一本は「義仲——兼遠」関係を潜在化した／読み手（聞き手）にそれを相互補完的に再構築させる語りの構造を帯していたと言えるのである。

源氏の棟梁たる義仲形象化に窺える語りの位相

延慶本が義仲の武将性を顕示的に語る語りの構造を構築していることについては先述した。殊にその武将性は兼遠から彼の妻に向けられた発話において顕著に語られている。「カクシ置、養育」（延慶本）したのであるから、義仲について語らう相手が特に妻であったことは、当然のことであったのかもしれない。それにしても、「養父母の許で成長を遂げる義仲像／義理を超越した親子愛」が髣髴とする。

しかしながら、延慶本における兼遠の発話に相当する覚一本のそれ（教材本文傍線部）は間接的には義仲に向けられたものであり、発話の発信者たるや兼遠ならぬ「人」であったことに着目しておきたい。——ここでの「人」は「信濃国」に点在した小武士団の面々を想起させる。また、「人」なる言表は「人」を仮託した語り手の素顔であるとも指摘できる。因に、百二十句本・四部本・盛衰記には相当する発話が存在しない。——しかも、「人」の発話内容は「上古の田村、利仁、余五將軍、致頼、保昌」と、現在の東北・北陸地方において名声を馳せた歴代の勇将を挙例し、「先祖頼光、義家朝臣」を加えた上で「争でかにははまざるべき」と括る、源氏の血脈を受け継いだ義仲の秀逸なる武将性に対する

賛辞を込めるものであった。さらに、本発話後の語りは兼遠だけではなく、読み手（聞き手）をも震撼させる、それでいてどこか荘厳な天下二分の統治を「ほのめか」す義仲の発話へと引き継がれてゆく。ここにおいて読み手（聞き手）は、「日本国二人の將軍といはればや」が頼朝を意識した発話であることを承知しながら、その発話を語らせる語り手の欲望が、平家を討伐し、平家の勢力を失墜ならしめ、日本国を統べるべきが源氏一族であるとするとところにあることを看過してはならないのである。義仲の父義賢は頼朝の兄、「鎌倉の悪源太義平が為に誅せら」れていた。言わば、頼朝は義仲にとって仇敵に匹敵する存在である。それでありながら、義仲に「二人の將軍」と語らせる語り手は、間接的な仇敵征伐よりも、先ずは平家討伐／源氏一族の共同戦線↓再興を遂げようと冷静に目論む義仲の形象化に成功を収めている。

以下、覚一本の語りは元服の物語内容を経て、文字どおり「木曾次郎義仲」生誕↓蜂起へと読み手（聞き手）を誘ってゆく。そして、ここにおいても、読み手（聞き手）は義仲の生誕を奇しくも「四代の祖父、義家朝臣」が「此御神の御子となつて、名をば八幡太郎と号し」た「八幡大菩薩の御まへ」であったとする語り手に留意しておかなければならないのである。それは、これら一連の語りが義仲生誕の背後に存する偉大なる祖先義家の（神的）加護に加え、今は亡き父義賢の威光に導かれるがごとく、二国から成る武士団形成を成就した源氏の棟梁、義仲の形象化に傾注した語りだからである。こうした源氏一族再興の予兆に視点を据えた語りは、覚一本に特徴的であると言つて良からう。それでいな

がら、覚一本の語り手は「謀叛をくはたてけり」——頼朝に言及する義仲の発話においても、語り手は「兵衛佐頼朝既に謀叛をおこし」と義仲に語らせている——と語つて憚らない。諸テクストの言表「謀叛」が平家を畏怖する言説を加味する傾向にあることに比して、覚一本のそれは源氏一族再興の予兆を隠匿し、潜在化した「騙りの構造」を構築しているのである。したがって、「平家末になる折をえて、源氏の年来の素懐をとげんとす」は正に語り手の本心が露顕した語りということになるうか。だからこそ、語り手は「其者心にくからず。」(覚一本・巻六「飛脚到来」)と安穩として新たな時流に対する先見性を持たない清盛を密かに語るのである。これは新時代の風雲児義仲と語りくらべを行うことで、義仲像の更なる鮮明化を企図するだけではなく、作品世界内における平家↓源氏への過渡的な政権交替をも暗示する語りなのである。

だが、その義仲の政権も同族である頼朝によって短命にして終わる。すなわち、木曾義仲の作品世界における生誕は、源氏一族の復興を願ひ、先ずは「日本国二人の將軍といはればや」と無垢に語つた義仲にとつては、あまりにも虚しくて儂い悲劇の幕開けでもあつたのである。

註1 梶原正昭「古典講読シリーズ 平家物語」 岩波セミナー

ブックス101。一九九二・六、8頁

尚、梶原は、義仲のみに幼少期から青年期を形象化する語りが存在すると指摘している。

註2 本稿において分析の対象としたテクストは、覚一本・百二十句本・延慶本・四部本・盛衰記であり、考察の範囲もこれらのテクストに限定している。

註3 吉村貞司「平家物語の悪の構造」47頁下段10行目〜17行目
(「國文學」、一九七二・二、學燈社)

註4 梶原前掲書。14頁

註5 教材本文の直前に配置された語りである。

註6 下出積與「源平抗争期の〈北陸〉」133頁下段8行目〜134頁

上段4行目(「國文學」、一九七二・二、學燈社)

註7 下出前掲論文。135頁下段4行目〜13行目